

1. **PERSON** 18・19世紀、ドイツの哲学者。主観的弁証法を駆使し、カントが確立したドイツ観念論哲学を完成。歴史発展の法則や、個人と市民社会や国家との関係について論じた。 1
2. **BOOK** ヘーゲルの主著。主観的弁証法を駆使した独自の哲学を説く。 2
3. ヘーゲルが、変化・発展を理性的な運動の論理であると説いた考え方。全てのもは、肯定される一つの定立（正）に対してそれを否定する別の定立（反）があらわれ、矛盾・対立する正・反二つの要素を保存しつつ両者を否定して、より高い次元（合）に発展する（止揚）。ドイツ語で正はテーゼ、反はアンチテーゼ、合はジンテーゼ、止揚はアウフヘーベン。 3
4. ヘーゲルの歴史観で、歴史とはこれが弁証法的に自己展開する場であるとした。主観的で唯心論的な弁証法により、歴史発展の法則を説明。 4
5. ヘーゲルの歴史観で、歴史の原動力としたもの。ナポレオンを典型とする英雄の行動によって表面化するとした。 5
6. **BOOK** ヘーゲルの主著。主観的弁証法を駆使して、道徳・法と人倫、家族・市民社会と国家について論じた。序論の言葉が10.の**WORD**。プラトンの理想主義のカント哲学に、アリストテレス的現実主義を取り入れた観念論哲学を大成。 6
7. ヘーゲルが、個人の主観的な確信に過ぎない道徳と、社会の客観的なルールである法の両者を統合したものとして重視した。 7
8. ヘーゲルの説く人倫の三段階発展説で、そのテーゼ（正）にあたるもの。愛で結合する全体性がプラスの要素だが、個人の独立性がないことがマイナスの要素。 8
9. ヘーゲルの説く人倫の三段階発展説で、そのアンチテーゼ（反）にあたるもの。個人が独立する個別性がプラスの要素だが、各人が欲求を満たすために経済活動を行う「欲望の体系」であることがマイナスの要素。 9
10. ヘーゲルの説く人倫の三段階発展説で、そのジンテーゼ（合）にあたるもの。家族の共同性と市民社会の個人の独立がアウフヘーベン（止揚）された、人倫の最高形態。 10
11. **WORD** ヘーゲルが、理性の自己展開のあらわれが現実であり、現実とは偶然の結果でなく理性の自己実現という必然的なものと説いた言葉。 11
12. 18・19世紀、産業革命後のイギリスに成立した哲学。人生の目的を幸福と快楽の追求と考え、それに役立つことを真理とした。 12
13. 18・19世紀、イギリス功利主義の代表的思想家。『道徳および律法の原理序論』を著し、快楽は計算可能として量的幸福を重視した。 13
14. ベンサムが、快楽は計算可能として量的幸福を重視した有名な言葉。 14
15. 19世紀、イギリス功利主義の代表的思想家。『功利主義論』や『自由論』を著し、ベンサムの功利主義を修正して質的幸福を重視した。 15
16. **WORD** ミルが、快楽は計算不可能として質的幸福を重視した有名な言葉。 16
17. 法や刑罰などの外的制裁が利己的な快楽追求を抑制するとしたベンサムに対し、その上位にあるとしてミルが強調した内的制裁。 17

T.Q. 「ベンサムとミルの功利主義の違いとは？」

T.A.

ベンサムは量的功利主義を主張し「最大多数の最大幸福」と説いた。また、外的制裁により利己的な快楽追求は禁止した。ミルは質的功利主義を主張し、精神的快楽を重視した。また、内的制裁が上位であるとし、良心やイエスの黄金律を強調してベンサムの功利主義を完成させた。